

五代友厚の弘成館と幹部たち―「弘成館員履歴表」を中心に―

森島 克一

【目的】

五代友厚は、金銀分析所の成功で得た利益を原資に鉱山業に乗り出した。1871(明治4)年、天和鉱山を皮切りに、半田銀山など所有鉱山は29か所にのぼり、1877(明治10)年時点で、住友家に次ぐ鉱山企業家になった。大阪経済再建を目指した彼の財界活動は、鉱山業という資金面の支えがあつてのことであつた。1873(明治6)年1月、その鉱山事業統括のため設立されたのが弘成館で、「弘成館規則」など体系的な規程を備え、今日の監査機能に近い仕組を有する近代的経営組織であつた。

大阪商工会議所所蔵『五代友厚関係文書』に、「内部外部弘成館員履歴表」(R-27-20、以下「履歴表」)がある。1873(明治6)年2月から1928(昭和3)年1月までの56年間における職員名簿である。弘成館員各々の氏名、住所、生年月日、入館日・退職日、職位・俸給の履歴等が記された社内文書である。しかし、先行研究では参照されることはあつても、直接の研究対象として取り上げられることはなかつた。本研究では、この「履歴表」を中心にして、弘成館とその館員について考察を試みた。

【内容】

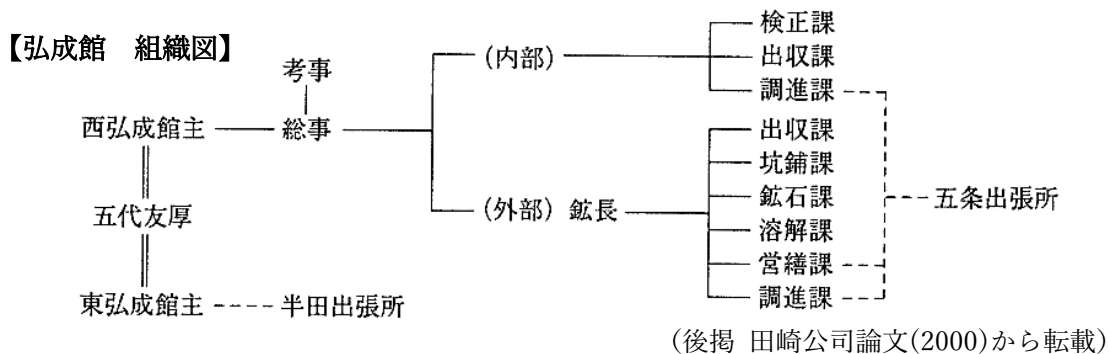
まず「履歴表」にある設立時点の館員の脱漏分を「弘成館規則」により補正し、一表にまとめた。併せて、評伝・先行研究や『五代友厚関係文書』中の書簡等を参照することにより分析を試みた。そして、五代友厚の弘成館事業における人材登用・活用や処遇等の運用・管理について考察した。さらに、これまで無名だった幹部たち(主として、弘成館入館後に五代との関係が始まり、業務経験を積んで鉱長・副鉱長に昇進した人物)について、彼らの入館前および退職後の経歴を含めて考察し、その特徴的な人物像を明らかにすることを目指した。

【結果】

館員の入社が、明治6~7年と明治15~17年の二つの時期に集中していることについては、弘成館の二つの事業ピークに対応しており、事業展開が人員に反映されたものと考えた。次に、館員のうち士族の割合が相対的に高く、特に、鉱長・副鉱長に顕著である点に注目し、鉱長候補生の採用を重視し、鉱業や化学の隣接分野である砲術の素養や経験を持った人材を求めた結果であると結論づけた。さらに、これまで無名だった幹部数人のうち、特徴的な人物3名(湯川宗、波多野央、杉村次郎)について紹介した。彼らが、経験豊富な技術者・経営者として、鉱業界や化学工業界を中心に残した足跡だけでなく、弘成館が、技術人材養成や人脈形成の器として果たした役割を垣間見ることができるのではないかと考えている。

弘成館の組織と俸給

「弘成館規則」などにより定められていた組織体系は下図のとおり。特筆すべきこととして、検正課を設け、正検を任命し、鉦山経営を内部でチェックする仕組みを有していた。また、俸給体系として「一等俸」から「二十等俸準」まで40段階の俸給等級が設定され、「五等俸準」以上は直撰(館主自ら任命)、「九等俸準」以上は撰問(各所鉦長が館主に申請)、「十等俸」以下は専撰(各所鉦長が任命)と定められていた。さらに簿記法にも工夫がこらされており、従来の鉦山経営には見られない斬新なものであった。



「履歴表」に見る人事運用の傾向

最初に分析の前提を明らかにしておく。「履歴表」には脱漏が認められる。特に設立当初の館員の漏れが目立つので、「弘成館規則」にある設立時点の館員情報で補正し、明治6年(設立年)から明治18年(五代の逝去年)の間に在籍した館員を一表にまとめた(【参考資料】「弘成館員職位・俸給推移表」)。総人数は138人(うち「履歴表」に掲載されているのは82人)である。しかし、明治7年4月7日桂久武宛五代友厚書簡(『五代友厚伝記資料』第1巻、書翰番号233)には「拙僕社中、既に百三拾余名有之候」とあり、片岡春卿編『贈正五位勲四等五代友厚君伝』(明治28年9月)には「一時館中役員と称する者二百余名」(『五代友厚伝記資料』第1巻、34頁)とある。これらに多少の誇張が含まれているかもしれないが、一応正しいと仮定した場合には、「履歴表」に上記補正を加えた後も、明治7年ごろに約50人分、明治17年ごろに約80人分の漏れがあることになる。従って、以下においては、脱漏の影響を比較的受けにくい動態や比率を中心に人事運用の傾向を見ることとする。

上記の総人数138人について見ると、入社年が、明治6~7年(約80人)と明治15~17年(約40人)の二つの時期に集中している。田崎公司論文(2000)によると、五代の鉦山業のピークは、1871(明治4)年から1874(明治7)年までの前半と1879(明治12)年から五代の死の前年である1884(明治17)年までの後半との二つの期間にある(78頁)とされていることに徴し、事業状況が人員に反映されているものと見られる。

さらに、次のようなことがわかる。

- 「弘成館規則」にある当初館員66人の出身地は、大阪が12人、大和と美濃が11人、京都と生野が6人と目立つ。薩摩は4人で意外に少ない。
- 勤続年数がわかっている67人の平均は11年(最長38年、中央値7年)。近年の平均勤続年数12.7年(国税庁「民間給与実態統計調査」2022年)と比較しても遜色ない。
- 複数課の兼務が多い。朝陽館との兼務、相互間の異動も見られる。
- 同じ職位でも課によって俸給に差がある。
- 昇格と昇給は同時でないことが多い。昇給は一段階が基本。二段階昇給は少ない。
- 懲罰的な降格・減給も見られるが、比較的短期間で復元させている。
- 休職中も一定期間支給金があるケースがかなり見られる。
- 鉦山駐在(天和山、半田山、和気山、大立山、豊石山など)関連の異動が多い。
- 士族の割合が相対的に高い(138人中、士族と判明している者だけで29人(21%)で、明治初期の士族の割合が全国平均で5%前後とされているのに比べかなり多い)。

- 鉱長の職位に任命されることは稀。副鉱長の職位の者がいる場合、通常、鉱長は空位。この場合副鉱長の対外呼称は「鉱長」となる。大課長と副大課長、小課長と副小課長なども同様。
- 鉱長・副鉱長には士族を登用する例が多い。
- 鉱長・副鉱長に登用する前に正検を経験させているケースが見られる。
- 正検欠員時に相互検印の措置を命じており、厳格な運用を維持しようとしている。
- 特に明治15年以降、鉱長・副鉱長の世代交代が見られる（主に、入館後実務経験を積んで昇進した人や設立後の入館者）。

鉱山駐在関係の異動が多いのは、経営する鉱山の増加と現場への関心が高いことを表している。また、鉱長・副鉱長を重視していることは、現場での指揮権限はもちろん、俸給の実質的な決定権限を与えていることや登用前に正検を経験させる一種のキャリアパスにも表れている。鉱長・副鉱長を重視する必要があるのは、鉱山業一般の特色であろう。

従って、弘成館において鉱長・副鉱長に士族を登用した例が多い点は注目すべきである。鉱長・副鉱長たちの出身藩(鳥取、彦根、姫路、会津、高梁(備中松山))は、稲富流・藤岡流・荻野流など様々な流派の砲術師を招き、幕末には高島流など西洋流砲術を取り入れ、藩校などを通じて藩士に対し砲術の奨励をおこなった(『鳥取市史』『彦根市史』『姫路市史』『会津若松市史』『高梁市史』)。一方、五代の右腕であった久世治作・義之助父子や古河鉱業の技術を支えた中江種造の鉱山・化学技術者としての出発点は砲術にあった(『久世喜弘翁』20頁、同『中江種造伝』上、127～9頁)ことを考えると砲術と化学との強い関係性が認められる。また、明治7年8月21日阪井吾一書翰の「東京弘成館設立に付ては入館願の者も多々あるべくも厳選されたし」(R-9-200)からは、弘成館への入館志望者が多く採用側優位の状況だったことがわかる。これらのことから、弘成館として、鉱業や化学の隣接分野である砲術の素養や経験を持った人材を求めた結果、士族の割合が高くなり、士族出身の鉱長・副鉱長の幹部が多くなったと考えられるのである。

知られざる幹部館員の人物像

弘成館の幹部の中には、岩瀬公圃、波江野休衛、堀孝之、中井新八、阪井吾一、久世義之助、吉田市十郎など評伝などに名が登場しある程度知られている人物がいる。その一方で、これまでほとんど知られていない人物(湯川宗、杉村次郎、波多野央、金子俊一、高田富太郎、宮地長夫、松浦建二)も見出すことができる。後者の面々は、主に、入館後実務経験を積んで現業の責任者である鉱長・副鉱長に昇進した人物であり、彼らの入館前および退職後の履歴を含めて考察した。ここでは、紙幅の関係もあり、特徴的な人物三名(湯川宗、波多野央、杉村次郎)について紹介したい。

湯川宗

1850(嘉永3)年生まれ。旧鳥取藩士族。弘成館勤務は明治7年(25歳)～24年(42歳)。入館2年目で副正検、3年で半田山副鉱長(鉱長は空位)に昇進するも、年内に更迭。その後、天和山および豊石山にて副鉱長(鉱長は空位)。また、五代の葬儀で「供奉」をつとめた。明治22年日本鉱業会の終身会員。明治24年弘成館を休務(実質的な退職か)となっている。弘成館退職後は、中江種造の求めに応じて五木鉱山の支援をした。中江が支援を依頼した理由は、湯川が弘成館で3鉱山(半田・天和・豊石)の鉱長を経験したことを評価してのものと書簡からうかがえる。但し、湯川の意見に対して中江は「貴君が説く方法は良いものだが、官業や大資本家の事業には適しても、私のような貧しい事業家には向かない」と採用には至っていない。中江と湯川ひいては五代の事業展開の違いを反映するものと考えられ興味深い。その後湯川は、佐々田氏経営の二川鉱山の鉱長を勤め、さらに鹿籠金山で採金業を営んだ。鉱山業引退後(明治40年ごろ)、大阪硫曹株式会社(現・日産化学の源流の一)工場長・技師として化学肥料業界に転身した。この転身は、『農業雑誌』(学農社、第27巻)に生来農業に興味があったと述懐していることと関係があるかもしれない。また、大阪硫曹の取締役には久世義之助が名を連ねることから、二人の親交が弘成館退職後も続いていたと考えられる。1912(大正元)年死去(63歳)。

弘成館での実務経験や実績を基礎にして、退職後も鉱業や化学工業の業界で技術者として活躍した点は典型的な弘成館出身者といえる。金子俊一、高田富太郎、宮地長夫、松浦

建二も概ねこの類型に属する。これに対し、これから紹介する二人は全く異質の経歴を持つ人物である。

波多野央

1836(天保7)年生まれ。旧幕臣。旗本とされている。旗本に波多野姓は数件見られる(『柳宮補任』東京大学出版会、1963~70)が特定はできていない。幕末には見廻組組頭を勤めているほどなので、幕臣としては大身であったと考えられる。鳥羽伏見の戦いに見廻組組頭として参戦、部下を亡くしている。明治元年には伊藤俊輔(博文)知事のもと兵庫県庁市政局幹部となる。その後、明治6年の小野組転籍事件※では、小野組に京都府権大参事・榎村正直を告訴するよう進言している。この頃には五代に知られていた可能性がある(当時五代は小野組の名誉顧問、小野組は弘成館の財主の一)。

※小野組転籍事件 明治6年京都の豪商小野組が京都府に東京などへの転籍届を提出したのに対し、許可しなかった府と小野組との間で訴訟となった。これを契機に、中央政府・司法を巻き込む権力闘争に発展した事件。

弘成館勤務は、明治9年(41歳)~明治19年(51歳)。入館時に「二等副正検 朝陽館兼務 九等俸」を拝命しているので、当初から幹部として採用されたとみられる。明治14年に半田銀山の副鉱長(鉱長は空位)に就任、鉱石・溶解・機械の三課を廃し製鉱課に統合。翌15年鉱長に昇任。「諸課定夫頭規則」「半田山定夫規則」等を制定し職務規律の徹底を図った。製鉱課に採鉱・焼鉱・混汞の三部を設置。また製銀課を設置。明治18年まで鉱長に在位、組織改革と管理厳正化により、半田銀山の最盛期を築いた功労者。明治19年退職(51歳)。明治20年日本鉱業会を退会。弘成館退職後は鉱山業には関わらなかったようである。明治26年4月に正七位に叙せられている。明治28年5月に国幣中社田村神社宮司に補されているが、翌月に辞めている。

杉村次郎

1852(嘉永5)年生まれ。旧彦根藩士族。20歳の若さで東京私立英学校の教官。これは経歴から考えて、彦根藩で得た砲術の知識・経験を背景にしたものと考えられる。弘成館勤務は明治6年(22歳)~14年(30歳)ごろか。主に蓬谷鉱山の開発を担当、副鉱長を勤めた。山内山鉛山、水沢山水銀山などにも関わっている。五代友厚と深い親交があった滋賀県参事・籠手田安定の許で女中勤めをしていた美乃と明治8年に結婚している。五代から独立した後は、面谷鉱山、三光銅山に関わった後、工部省入省、鉱山局権少技長に昇進した。明治20年に工手学校(工学院大学の前身)の設立に関与し、発起人、管理委員、採鉱学科教務主理に就任。工手学校は、日本の工業化に伴い生産現場における技術者の養成が急務となり、帝国大学総長・渡辺洪基らが中心となり東京・築地に創立したもので、杉村のほか発起人には、石橋絢彦、藤本寿吉、古市公威、辰野金吾など当時の工部大学校や帝国大学の若手教授等14名が名を連ねている。従って、当時杉村は、鉱業界を代表する技術者・有識者として評価されていたことがわかる。そのほかには、日本鉱業会の設立に携わり、『金石学必携』『飛騨神岡鉱山記事』『本邦硫黄論』などの著作等で鉱工業界に多面的な貢献をした。また、東京鉱業株式会社社長として倉谷鉱山の経営にあたったが、明治26年に鉱毒事件が起きている。1895(明治28)年に44歳の若さで死去。

(参考文献等)

大阪企業家ミュージアム『五代友厚関係文書目録 書翰・書類 検索』(「R-」はリール番号)

https://www.justice.co.jp/kigyoka/godai_letter_search.php

日本経営史研究所編『五代友厚伝記資料』東洋経済新報社、1971年

宮本又次『五代友厚伝』有斐閣、1980年

宮本又次「五代友厚の鉱山業と弘成館」(『経済人』33(4)(5)、関西経済連合会、1979年)

田崎公司「五代友厚と半田鉱山—明治初期大阪経済再建策とその挫折」(『大阪商業大学比較地域研究所紀要』第3号、2000年)

長沢康昭「弘成館決算表について」(『福山大学経済学論集』3(1)(2)合併号、1978年)

八木孝昌『新・五代友厚伝 近代日本の道筋を開いた富国の使徒』PHP研究所、2020年

田付茉莉子「工業化のリーダーシップ—五代友厚」(由井常彦編『工業化と企業者活動』(日本経営史講座 第2巻、日本経済新聞社、1976年))

渡辺勝(碧瑠璃園)『久世喜弘翁』久世勇三、1920年

曾我鍛編『中江種造伝』上、中江竜二、1941年

中島伸男『近江鈴鹿の鉱山の歴史』サンライズ印刷、1995年

五代友厚の弘成館とその幹部たち

—「弘成館員履歴表」を中心に—

大阪公立大学研究推進機構 大阪検定客員研究員
森島 克一

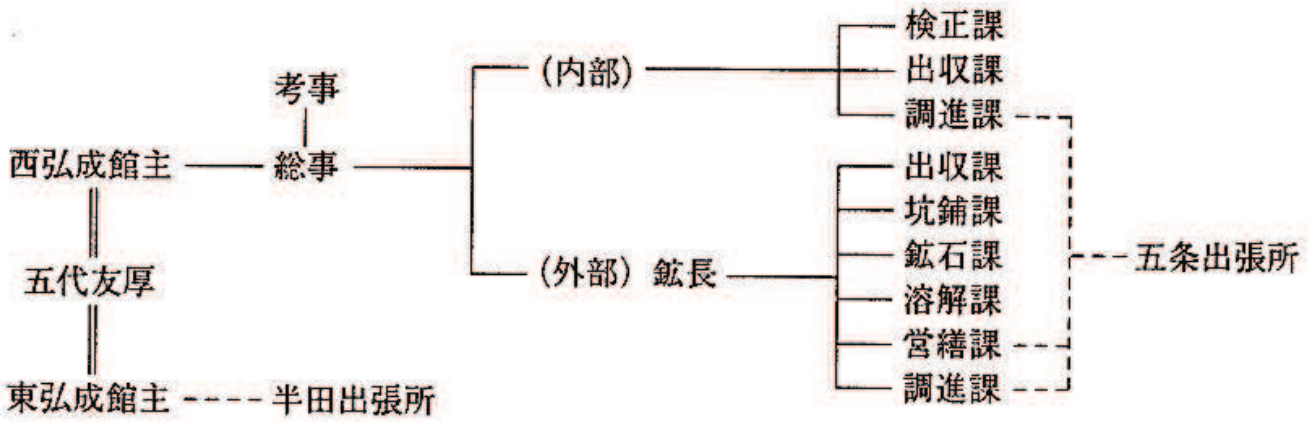
1



「大日本持丸長者鑑」
(早稲田大学図書館所蔵)

2

弘成館の組織体系



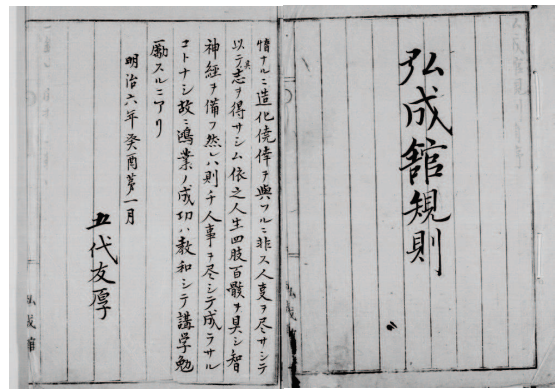
(出典:田崎公司「五代友厚と半田鉦山—明治初期大阪経済再建策とその挫折」)

弘成館の俸給体系

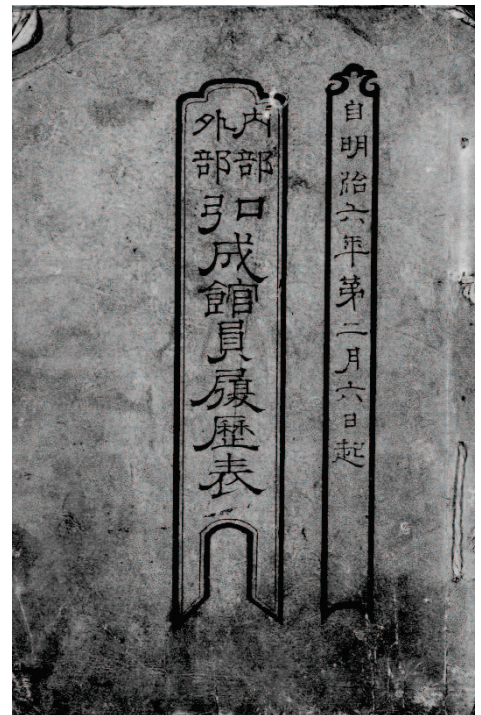
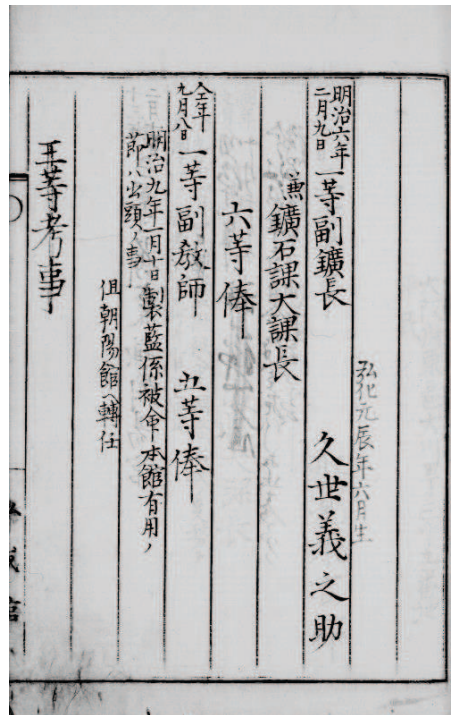
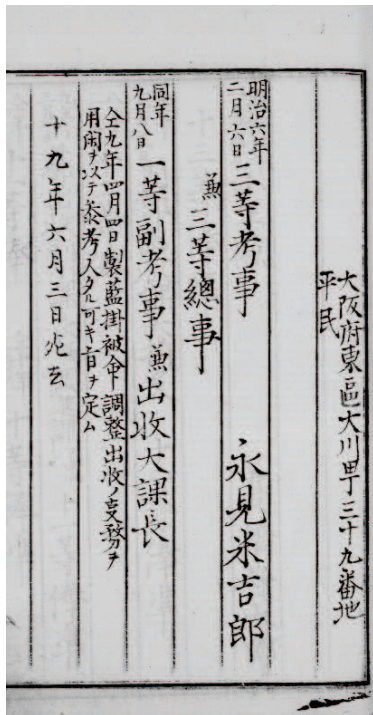
40の俸給等級

- 五等俸準以上:直撰(館主自ら任命)
- 九等俸準以上:撰問(各所鉦長が館主に申請)
- 十等俸以下:專撰(各所鉦長が任命)

「弘成館規則」大阪商工会議所蔵(R-27-1)



等級	俸給	備考
第十等俸	全半	全 八圓
第九等俸	全半	全 九圓
第八等俸	全半	全 拾圓
第七等俸	全半	全 拾壹圓
第六等俸	全半	全 拾貳圓
第五等俸	全半	全 拾參圓
第四等俸	全半	全 拾肆圓
第三等俸	全半	全 拾伍圓
第二等俸	全半	全 拾陸圓
第一等俸	全半	全 拾柒圓
第十等俸以下	專撰	全 壹圓



「内部外部弘成館員履歴表」大阪商工会議所蔵(R-27-20)

【参考資料】「弘成館員職位・俸給推移表」

- 「履歴表」をベースに「弘成館規則」にある情報を加え、明治6年(設立年)から明治18年(五代の逝去年)の間の在籍者を一表にした。総人数は138人。
- 「拙僕社中、既に百三十拾余名有之候」(明治7年4月桂久武宛書簡)
- 「一時館中役員と称する者二百余名」(片岡春卿編『贈正五位勲四等五代友厚君伝』(明治28年9月))
- 明治7年ごろに約50人分、明治17年ごろに約80人分の漏れ。

「弘成館員履歴表」等からうかがえること

- 入館者の二つのピークと事業のピークとほぼ一致。
- ……………
- 平均勤続年数
- ……………
- ……………
- ……………
- ……………
- 士族の割合が相対的に高い。
- ……………

7

「弘成館員履歴表」等からうかがえること

- 士族の割合が相対的に高い。
138人中、士族と判明している者だけで29人(21%)
⇔ 明治初期の全国平均5%程度
- 特に、鉦長・副鉦長に士族を登用する例が多い。
- 明治15年以降、鉦長・副鉦長の世代交代

8

砲術と士族出身の幹部たち

- 鉦長・副鉦長の出身藩：鳥取、彦根、姫路、会津、高梁(備中松山)
 - 様々な流派の砲術師を招き、藩校などで砲術を奨励。
 - 砲術は鉦山・化学と隣接分野(砲術が鉦山・化学技術者の入口)。

• 採用側優位の状況

「東京弘成館設立に付ては入館願の者も多々あるべくも厳選されたし」
(明治7年8月阪井吾一書簡)

- 砲術の素養や経験を持った人材を求めた結果、士族出身の鉦長・副鉦長の幹部が多くなった。

9

弘成館の幹部について

- 評伝等に名が登場する7人

岩瀬公圃／波江野休衛／堀孝之／中井新八／阪井吾一／久世義之助／吉田市十郎

- ほとんど知られていない7人

金子俊一／高田富太郎／湯川宗／宮地長夫／松浦建二／波多野央／杉村次郎

- 後者の面々は、主に、入館後業務経験を積んで現業の責任者である鉦長・副鉦長に昇進した人物

10

湯川 宗

- 嘉永3(1850)年生まれ。旧鳥取藩士族。
- 弘成館勤務は明治7年(25歳)～24年(42歳)。
- 入館後3年で半田山副鉦長(鉦長は空位)に昇進も、年内に更迭。
- その後、天和山および豊石山にて副鉦長(鉦長は空位)。
- 明治24年弘成館を休務(実質的な退職か)。
- 弘成館退職後は、中江種造の求めに応じて五木鉦山の支援。
- 中江の依頼理由は、湯川が弘成館で鉦長経験者であったこと。

11

湯川 宗

- 但し、中江は「貴君が説く方法は良いものだが、官業や大資本家の事業には適しても、私のような貧しい事業家には向かない」と書簡で述べている。 >>>中江と湯川、ひいては五代の考え方の違いを反映するものと考えられ興味深い。
- 鉦山業引退後(明治40年ごろ)、大阪硫曹株式会社(現・日産化学の源流の一)工場長・技師として化学肥料業界に転身した。
- 大阪硫曹の取締役には久世義之助の名があることから、二人の親交が続いていたと考えられる。

12

湯川 宗

- 大正元年(1912)死去(63歳)。
- 弘成館での経験や実績を基礎にして、その後も鉱業・化学技術者として活躍した点は典型的な弘成館出身者。金子俊一、高田富太郎、宮地長夫、松浦建二も概ね同様。
- これに対し、これから紹介する二人は全く異質の経歴を持つ。



出典：学農社/編
『農業雑誌』
27(19)(810)、学
農社、1902年7
月)

13

波多野 央

- 天保7年12月生まれ。旧幕臣。旗本とも。
- 鳥羽伏見の戦いに見廻組組頭として参戦。
- 明治元年には伊藤俊輔(博文)知事のもと兵庫県庁市政局幹部となる。
- 明治6年の小野組転籍事件では、小野組に京都府権大参事・榎村正直を告訴するよう進言。この頃には五代に知られていた可能性あり。

14

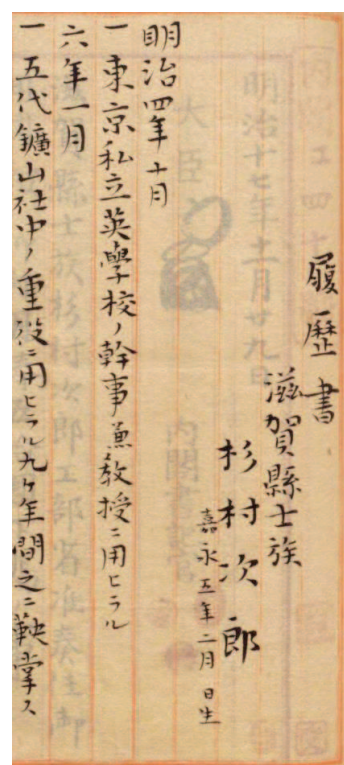
波多野 央

- 弘成館勤務は、明治9年(41歳)～明治19年(51歳)。
- 入館時「二等副正検 朝陽館兼務 九等俸」を拝命。当初から幹部として採用されたか。
- 明治14年に半田銀山の副鉱長(鉱長は空位)に就任、翌年鉱長に昇任。組織改革と管理厳正化により、半田銀山の最盛期を築く。明治19年退職(51歳)。
- その後は鉱山業に関わらなかった模様。明治26年4月に正七位。明治28年5月に国幣中社田村神社(讃岐国一宮)宮司。

15

杉村 次郎

- 旧彦根藩士族。20歳で東京私立英学校の教官。
- 弘成館勤務は明治6年(22歳)～14年(30歳)ごろか。
- 主に蓬谷鉱山の開発を担当、副鉱長を勤めた。
- 独立。面谷鉱山などを開発・経営。
- 工部省入省、鉱山局権少技長に昇進。



「公文録・明治十七年・第二百卷・官吏進退(工部省)」

16

杉村 次郎

- 明治20年に工手学校(工学院大学の前身)の発起人。採鉱学科教務主理に就任。
 - 工手学校は、工業立国のため、帝国大学総長・渡辺洪基が中心となり創立された技術者養成機関。
 - 発起人は、石橋絢彦、藤本寿吉、古市公威、辰野金吾など当時の工部大学校、帝国大学の新進気鋭の教授等14名。
- 杉村は鉱業界を代表する技術者・有識者として評価されていた。

17

杉村 次郎

- 日本鉱業会の設立に携わり、『金石学必携』『本邦硫黄論』などの著作・論文で鉱工業界に多面的な貢献。
- 独立後も弘成館メンバーと交流。
- 東京鉱業株式会社社長として倉谷鉱山の経営にあたったが、明治26年に鉱毒事件が発生。
- 明治28年に44歳で死去。



出典：工学院大学学園百年史編纂委員会『工学院大学学園百年史』

18

(まとめ)弘成館の無名の幹部たち

- 士族出身の無名の幹部のうち、特徴的な人物3名に焦点。
- 現場経験あるいは人生経験の豊富な技術者や経営者として、鉱業界や化学業界に残した足跡
- 弘成館が、技術人材養成や人脈形成の器として果たした役割

19

五代友厚の弘成館とその幹部たち —「弘成館員履歴表」を中心に—

ご清聴ありがとうございました

大阪公立大学研究推進機構

大阪検定客員研究員

森島 克一

20

【参考資料】知られざる幹部館員の人物像

金子俊一

<経歴>

福島県岩代国北会津郡馬場町11番地、平民出身（『履歴表』）となっている。明治11年6月26日付の五代友厚宛籠手田安定※書簡によると、探索書に名が挙がっており、何らかの事情（おそらく旧会津藩との関係か）で政府からマークされていると思われる。

※籠手田安定は明治期の地方行政官。平戸藩士として幕末には藩の京都探索掛として活動。明治2年大津県大参事、8年滋賀県権令、11年県令と滋賀県政を担当。17年元老院議員、18年から島根、新潟、滋賀の知事を歴任。30年貴族院議員。男爵。（『朝日日本歴史人物事典』）

弘成館入館後、大正点 蓬谷山駐在、三等副正検と幹部候補として昇進、和気山鉱長の時「事務外の専断」で降級となっているが、すぐに復級し、天和山鉱長・大和各山総括、大立山開坑総括、鹿籠金山鉱長など主要ポストを歴任。弘成館の三等考事で天和山鉱長及大和各山総括兼務、大立山開坑総括だった明治13年、入角鉱山（兵庫県多可郡、銅・銀を産出）を譲り受けたとの記録がある。明治16年～17年ごろまでは弘成館で鹿児島県・鹿籠金山の鉱長として勤務している。日本鉱業会会員としての活動が明治19年頃より見られる。因みに終身会員に同時になっている湯川宗、杉村次郎とともに弘成館OB。弘成館を退職した時期は不明だが、退職後は、会津若松を拠点に鉱業に関わっていたと推測される。明治37年(1904)12月6日死去。

<資料>

- ① 其表、心齋橋筋今橋北へ入ル平井八重、堂号・紫雲楼ト号スルヨシ。右曾テ、問屋橋ノ辺ニ於テ、立志社宿ト看板ヲ掲候処、昨冬、前書ノ所へ転居、土州人ノ外、止宿セシメザルトコロ、頃日、会津人金子俊一郎寄宿ス、ト探索書中ニアリ。右金子ナル者ハ、当春、当県下へ御指出相成候、大和鉱山長ニハ無之カ。果シテ然ラバ、閣下、深き趣意アリテ、態ト、御指入相成候義ニハ無之カ。否、為心得、相窺候。早々御通知可被下候。右貴酬旁、如是御座候。（「五代友厚伝記資料」書翰番号350、五代友厚関係文書 R-9-51）
- ② 「鹿籠金山事業報告」（明治16年1月5日、同年9月1日、同年10月7日、明治17年1月4日、同年1月22日の各日付）（R-39-67～72）
- ③ 「鹿児島県穴ヶ原・神餅堀・小峰ノ前銀鉱山譲受契約 約定書写」（譲渡人）鮫島柳太郎他（譲受人）金子俊一（明治17年1月26日付）（R-30-26）
- ④ 上田太助が明治8年試掘許可を受け、明治11年2,000坪の借区を受け採掘、同13年1月これを大阪の人・金子俊一に譲り渡し、同年6月再び上田太助の稼行するところとなり、（『御料局生野鉱山地質説明書』農商務省地質調査所、明治26年12月）
- ⑤ 会員金子俊一君より本会へ混汞（こんこう）器の摸形一具を寄附せられたり。該摸形は即全形十分ノ一にして混汞鍋（Amalgamator）二個、分解器（Separator）一個、及び攪拌機（Agitator）一個あり、動力の送り方且つ据付等に至るまで総て精密に摸作せしものにして、曾てより薩摩鹿籠金山に於て適用せるものなれば、大に実業者の参観となるべき摸形なり。（日本鉱業会誌2（15）、1886(明治19)年）

- ⑥ 齊藤精一、湯川宗、金子俊一、杉村次郎の四君は規定の金二十圓を納めて終身会員となれり。(中略) 本会現在の会員は、賛成会員四十五名、終身会員三十三名、通常会員六百三十四名、総計七百七十二名なり (日本鉱業会誌 5 (53)、1889(明治 22)年)
- ⑦ 会員転居 金子俊一君 岩代若松市桂林寺町三丁目七十三番地吉田方 (日本鉱業会誌 17 (192)、1901(明治 34)年)
- ⑧ 会員転居 金子俊一君 岩代国若松市下一ノ町佐々木源八方 (日本鉱業会誌 18 (205)、1902(明治 35)年)
- ⑨ 会員消息 終身会員金子俊一君は十二月六日死去せらるる哀悼に堪えず (日本鉱業会誌 21 (239)、1905(明治 38)年 06 月 21 日)

高田富太郎

<経歴>

天保 10 (1839) 年 10 月生まれ。旧備中高梁藩士。弘成館勤務は明治 6 年(35 歳)~20 年(49 歳)。蓬谷山や和気山など現場の調進課や出収課を中心に経験を積み、半田山では波多野鉱長を補佐し組織改革に貢献した。正検が欠員の際には、「金銭出収に方り正検心得を以て検印」を任されている。その後豊石山では鉱長を勤めた。また、五代の葬儀で「供奉」を勤めた。弘成館を辞めた後も秋田県や福島県で鉱山業に携わった。杉村次郎との親交も認められる。鉱山業引退後に出身地高梁町の学校校舎新築に関わっている。

<資料>

- ① 一、元現米六石五斗二人扶持 改正現米七石二斗
同 [準下士] 高田富太郎
(永山卯三郎／編『吉備郡史』巻下、岡山県吉備郡教育会、昭和 13 年)
- ② 明治 22 年 5 月 日本鉱業会入会 (通常会員)。紹介者は杉村次郎。宿所は秋田県羽後国北秋田郡大巻鉱山 (『日本鉱業会誌』5(51)、1889 年 5 月)
- ③ 明治 25 年 福島県岩代国耶麻郡檜原銀山に転居 (『日本鉱業会誌』8(87)、1892 年 5 月)
- ④ 明治 26 年 10 月 日本鉱業会退会 (『日本鉱業会誌』9(104)、1893 年 10 月)
- ⑤ 明治 26 年 10 月 私立順生高等女学校 (高梁町、明治 14 年設立) の校舎「新築趣意書」に「新築委員」として名が見える (『上房郡志』上房郡教育会、1913 年、754 頁)。

湯川宗

<経歴> 本文参照

<資料>

- ① 津和野小学校に鉱物や動物剥製など博物標本を寄附 (『島根県私立教育会雑誌』(19)、島根県私立教育会、1886(明治 19)年 7 月)
- ② 齊藤精一、湯川宗、金子俊一、杉村次郎の四君は規定の金二十圓を納めて終身会員となれり。(日本鉱業会誌 5 (53)、1889(明治 22)年)

- ③ 曾我鍛 編『中江種造伝』下（中江竜二、昭和 16 年）に、五木鉦山（熊本県球磨郡）滞在中の湯川宗に宛てられた中江種造の書翰 5 通（明治 25 年 3 月 12 日付、4 月 11 日付、5 月 2 日付、5 月 6 日付、5 月 27 日付）が抄出されている。
- ④ 明治 25 年春～27 年暮 二川鉦山（島根県美濃郡二川村）の鉦主佐々田氏のもと鉦長として稼業指揮（竹中定次郎『雲石鉦山内容誌』、鉦業委託所、明治 36 年 5 月）
- ⑤ 居所「鹿児島県川辺郡東南方村鹿籠金山」（『日本鉦業会誌』14(166)、1898 年 12 月）（『工談雑誌』（121）、工談会、1899(明治 32)年 11 月）
- ⑥ 「採金業 湯川宗 鹿児島県川辺東南方村鹿籠金山」（『工談雑誌』（144）、工談会、1901(明治 34)年 12 月）
- ⑦ 「性農事を好むも若年より鉦業に従事し専ら農業に就くを得ず」「今や曾て従事せる鉦業も漸く老を以て、止むることに決意せる」（学農社/編『農業雑誌』27(19)(810)、学農社、1902(明治 35)年 7 月）
- ⑧ 「鉦山業 湯川宗 大阪市東区平野町字北平野」（『工談雑誌』（155）、工談会、1902 年 12 月、『日本鉦業会誌』13(154)(1897 年 12 月)、同誌号外(1907 年 12 月)も同様）
- ⑨ 工談会員退会（明治 35 年 12 月中）（『工談雑誌』（156）、工談会、1903 年 1 月）
- ⑩ 大阪硫曹株式会社 猪野鉦業場長兼中西鉦業場長・技師（商業興信所編『日本全国諸会社役員録』 明治 40 年、商業興信所）※当社には取締役として久世義之助が名を連ねる（筆者注）
- ⑪ 大阪硫曹株式会社 技師 猪野鉦業場長（『日本工業要鑑』 第 3 版 明治 41 年、工業之日本社）
- ⑫ 大阪硫曹株式会社工場 猪野鉦業場および中西鉦業場（徳島県三好郡三縄村） 工場長（小島一行『日本工業録』、工業雑誌社、明治 41 年 6 月）
- ⑬ 大阪硫曹株式会社 中西鉦業場長（『日本紳士録』第 1 4 版、交詢社、1910(明治 43)年）
- ⑭ 終身会員湯川宗君は同月二十三日・・・死去せられたり本會は茲に哀悼の意を表す（『日本鉦業会誌』28(330)、資源・素材学会、1912(大正元)年 8 月）

宮地長夫

<経歴>

旧姫路藩士。弘成館勤務は明治 6 年(22 歳)～明治 26 年(42 歳)ごろか。新慶山、和気山で現業経験を積み、和気山鉦長に就き、大登志山鉦長兼務、大立山鉦長を歴任。第三回内国勸業博覧会に出展した「銀鉦 字倉床」が褒章受賞。弘成館退職後も鉦業界と何らかの関わりがあった可能性があるが、その後、三十八銀行監査役に就いている。なお、旧姫路藩の銃術教授だった砂川雄健は同時期に同行支配人だったが、それ以前に、両者に和歌を通じた交流が認められる。五代の葬儀で「供奉」をつとめた。娘の綾が永見省一(永見米吉郎の子)の妻になっている。

<資料>

- ① 「銀鉦 字倉床」（『第三回内国勸業博覧会 褒章人人名録』、1890(明治 23)年 4 月 1 日～7 月 31 日）

- ② 明治 24 年「大阪市東区高麗橋五丁目一六番屋敷 大谷方」へ転居（『日本鉱業会誌』7(76)、1891 年 6 月）
- ③ 明治 31 年 9 月～32 年 12 月 三十八銀行監査役（『三十八銀行五十年誌』、三十八銀行、1928 年）、監査役の住所 大阪市高麗橋五丁目十六番地 明治 32 年 8 月 9 日登記済（大蔵省印刷局編『官報』1899(明治 32)年 08 月 15 日）
〔筆者注〕三十八銀行は姫路藩士族を中心に旧国立銀行として設立（合併して神戸銀行）。同時期に同行支配人だった砂川雄健※は、旧姫路藩士で同藩の銃術教授だった人物。
※砂川雄健：旧姫路藩士。幼にして好古堂に入りて文武を兼修す。年十八授読と為り、尋で銃術教授と為る。明治元年藩学生と為りて東京に至る。後三十八銀行計算簿記を掌り支配人に進む。天性和歌に巧にして佳詠多し。嘗て響洋社を結び、同志と歌道を研鑽し多く古人の歌を集む。著はす所多し。晩年播磨史談会長と為りて力を致せり。大正四年九月九日没す。年六十八。（播磨史談会編『姫路市史』姫路市、大正 8 年、267～8 頁）
- ④ 「君見よとおひ茂るらん呉竹ハ長きよはいをふしにこめつつ 宮地長夫」（砂川雄健 編『ちよの友』砂川雄健、明治 25 年 12 月）
- ⑤ 明治 33 年 日本鉱業会退会（通常会員）（『日本鉱業会誌』16(182)、1900 年 4 月）

松浦建二

<経歴>

長崎県出身。弘成館勤務は明治 7 年(23 歳)～25 年(41 歳)。出収課を中心に経験を積み、一時、朝陽館で製藍業にも従事。半田山で出収課長兼調進課長、ついで、副鉱長兼務し、波多野鉱長を支えた後、鉱長に就任。弘成館在任中に『半田銀山坑業沿革誌』（明治 20 年）を編纂する一方で、高玉鉱山鉱主となり自ら稼行している。弘成館を辞めた後は出身地の長崎県に帰ったが、鉱業界と何らかの関わりがあった可能性がある、1931(昭和 6)年 2 月 8 日死去(80 歳)。五代と関係の深い岩瀬（公圃）家や九里家と縁戚関係があった。

<資料>

- ① 大阪伏見町四丁目 製藍業 松浦建二（『交詢雑誌』（42）、交詢社、1881 年 3 月）
- ② 大坂高麗橋通二丁目三十四番地 製藍業 松浦建二（『交詢雑誌』（74）、交詢社、1882 年 2 月）
- ③ 高玉鑛山 福島県岩代国安達郡高玉村字中谷地外字一ヶ所
 鉱種 銀銅 借区人 松浦建二 借区許可 明治十九年八月七日
 全坪数 十一万四十坪 持主 松浦建二
 （松本徳太郎／編『日本帝国興業要覧』 松本徳太郎、明 22 年 4 月）
- ④ 高玉鉱山は蒲生氏郷藩領として経営されたのが最初と称され、蒲生氏転封と同時に永らく廃山に帰したのを、明治十九年長崎県人松浦建二なる人に依て復活し、後明治二十三年東京の人肥田昭作氏之を継承経営、・・・〔のち久原鉱業（のち日本鉱業）が買収〕（橘輝政『工業都市郡山』、郡山毎日新聞社、昭和 13 年）

- ⑤ 明治十九年長崎県人松浦建二氏が産銅量の豊富なのと、その品位の優良なのを認め、之を製錬し、傍ら坑内の取明け及び採探銅に従事した（日本産業調査会／編『最新大日本銅山史』 日本産業調査会、昭和 15 年）
- ⑥ 福島県郡山市北部、安達太良山南麓にある金・銀銅山。天正（1573 年-1592 年）のころ蘆名氏のとき蘆名四大金山の一つに数えられ、蒲生氏に引き継がれた。江戸時代中期以後は休山状態であったが明治に入って再開、昭和初年に銅業権が日本銅業（株）に移った。昭和 10 年代の半ばには北海道の鴻之舞（このまい）銅山、大分県の鯛生（たいお）銅山と並び、国内三大金山の一つであった。第 2 次大戦後も採掘が続けられたが、品位の低下などで、1961 年閉山。（平凡社『百科事典マイペディア』、「高玉銅山」の項）
- ⑦ 興信録によると、三女かねの夫が岩瀬徳蔵、その三男が岩瀬信弥、岩瀬信弥の姉ケイが久里正蔵の妻。
- ⑧ 住所「肥前国西彼杵郡上山里村七九番戸」「終身会員」（『日本銅業会誌』13(154)、1897 年 12 月）。住所については、『日本銅業会誌』14(166) (1898 年 12 月)、同誌号外(1903 年 12 月)、同誌号外(1907 年 12 月)も同様。
- ⑨ 1931(昭和 6)年 2 月 8 日死去（『日本銅業会誌』47(552)、資源・素材学会、1931 年 4 月）

波多野央

<経歴> 「本文」参照

<資料>

- ① 山本覚馬先生が薩摩屋敷へ禁錮の身となられたのは明治元年一月であった。当時共に監禁せられた中に、会津藩の松本清次郎、野澤雞一、安住運次郎、桑名藩の山崎幸一郎、幕人には波多野小太郎・遠山専之丞、佐久間英明などがいた。波多野は旗本で見廻組頭であったから相当な身分の人、のち波多野央と改め兵庫県知事伊藤俊介〔ママ〕（博文公）の下に県官となった。小野組事件で楨村を訴えさせた人物である。（青山霞村著『山本覚馬』、同志社、昭和 3 年）
- ② 慶応元年度の人事については、この年十二月二十二日付を以て、波多野小太郎（御徒目付）が与頭勤方に新任され、与頭勤方佐々木只三郎が与頭に昇進した（市居浩一「京都見廻組の概要」（『霊山歴史館紀要』、1989 年））
- ③ 明治二十九年一月 是月栄一、戊辰東軍戦死者追悼碑建設ノ趣旨ニ賛成シテ発起人ノ一人トナル。又明治三十五年九月ソノ祭典基金募集ニ際シテ発起人タリ。

戊辰東軍戦死者追悼碑建設趣旨書 明治二十九年

（中略）

京都見廻組（京都引揚ノ後狙撃隊ト改ム）

正月三日ヨリ六日ニ至ル鳥羽街道並淀橋本ニテ

京都見廻組頭並頭取兼 佐々木只三郎(三十三)

（中略）

正月六日 伏見ニテ

同波多野小太郎付属見廻組並 桜井大三郎(三十)

(竜門社編『渋沢栄一伝記資料』第28巻、渋沢栄一伝記資料刊行会、1959年)

- ④ [明治元年] 閏四月二十一日官制又改まり、五月二十三日兵庫裁判所廃せられて兵庫県置かれ、伊藤俊介〔ママ〕兵庫県知事に、東條慶次・中島作太郎判事に任ぜられ、(中略)十一月内治人民に関するものを総称して民政と云ひ、更に之を分ちて市政・郡政とし外務と相並びて三局を置き、(中略)市政局は事務を区分することなくして、判事田中頭輔其衝に当り、泰鑑一郎・北風荘右衛門・波多野小太郎之三人之に属し、庄屋・名主以下村役に於て取扱ふこととなれり。(『神戸市史』本編各説、神戸市、大正10~14年)
 - ⑤ 明治20年6月 日本鉱業会の通常会員を退会(『日本鉱業会誌』3(28)、1887年6月)
 - ⑥ 明治二十六年四月二十一日 叙正七位 波多野 央
 - ⑦ 明治二十八年五月二十三日 補 国幣中社田村神社宮司 正七位 波多野 央
 - ⑧ 明治二十八年六月二十日 依願免本職 国幣中社田村神社宮司 波多野 央
- (⑥~⑧：大蔵省印刷局編『官報』)

杉村次郎

<経歴> 本文参照

<資料>

- ① 嘉永5(1852)年、彦根生まれ。旧彦根藩士。滋賀県士族。明治4(1871)年、東京私立英学校の幹事兼教授。明治6年 五代鉱山社中の重役に用いられる。9年間執掌。(「公文録・明治十七年・第二百巻・官吏進退(工部省)」)
- ② 明治6(1873)年(21歳)五代友厚に譲り渡った蓬谷鉛山の経営権の引受人の名義となる。明治7(1874)年 蓬谷銀山の所長、山内山鉛山、水沢山水銀山を代理で買い入れ。
- ③ 明治8(1875)年 美乃(滋賀県参事・籠手田安定のところにいる女中)と結婚。
- ④ 明治10(1877)年、第一回内国勸業博覧会に凍石(スチールタイト)などを出品。
- ⑤ 明治11(1878)年、『マニエル・オブ・ミネラルジー』を抄訳、『金石学必携』刊行。五代友厚宛の籠手田書簡によると、このころから杉村の独立への挙動がうかがえる。
- ⑥ 明治12(1879)年、蓬谷山副鉱長。
(②~⑥：中島伸男『近江鈴鹿の鉱山の歴史』サンライズ印刷、1995年)
- ⑦ 明治14(1881)年、面谷山の地元民から技術改良依頼を受け、鑛業社設立(『三菱社誌 16 明治21~22年』(三菱社誌刊行会/編纂、東京大学出版会、1980年)。
- ⑧ 明治14(1881)年、福井県令より面谷銅山の改良を託され、鑛業社を設立し社長就任。
- ⑨ 明治17(1884)年、計画の事業を了る。兼て三光銅山を管理。(⑧⑨：「公文録・明治十七年・第二百巻・官吏進退(工部省)」)
- ⑩ 明治17(1884)年、大阪で鉱業会を設立、翌年日本鉱業会に吸収される(土井正民『わが国の19世紀における近代地学思想の伝播とその萌芽』(『広島大学地学研究報告』(21)、広島大学、1978年8月)
- ⑪ 明治17(1884)年、工部省御用掛、月俸50円(「公文録・明治十七年・第二百巻・官吏進退(工部省)」)。その後、農商務四等技師(工学院大学学園百年史編纂委員会『工学院大学学園百年史』(学校法人工学院大学、1993)。

- ⑫ 明治 18(1885)年、日本鉱業会設立に携わる。神岡の諸鉱山を視察して報告書「飛騨神岡鉱山記事」を『日本鉱業会誌』に発表（『三井事業史・本篇 第 2 巻』（三井文庫、1980 年）。
- ⑬ 明治 19(1886)年、鉱山局権少技長に昇進（『神岡鉱山史』（三井金属鉱業株式会社修史委員会/編、三井金属鉱業、1970 年）。
- ⑭ 同年、「本邦硫黄論」を『日本鉱業会誌』2 巻 20 号に発表（現在『日本鉱業史料集』（白亜書房、1991 年）所収）。
- ⑮ 明治 20(1887)年、工手学校（現・工学院大学※）設立に、発起人、管理委員、採鉱学科教務主理として携わる（前掲『工学院大学学園百年史』）。

※工学院大学

日本の工業化に伴い生産現場における技術者の養成が急務となり、1887(明治 20)年、東京帝国大学総長であった渡辺洪基（1847～1901）らが中心となり東京・築地に創立した工手学校が前身。1928(昭和 3)年に校舎を現在の西新宿へ移転、1949(昭和 24)年、新制大学の工学院大学となる。（小学館『日本大百科全書』）

（工手学校の創立者）

創立委員長：渡辺洪基（当時、帝国大学総長）

発起人：当時の工部大学校、帝国大学の若手教授等を中心に 14 名が名を連ねた。

石橋絢彦（土木） 藤本寿吉（造家） 大井才太郎（電気） 杉村次郎（鉱山）

中野初子（電気） 巖谷立太郎（鉱山） 古市公威（土木） 中村貞吉（化学）

水上彦太郎（機械） 山口準之助（土木） 井口在屋（機械） 三善晋六郎（造船）

辰野金吾（造家） 栗本廉（鉱山） （前掲『工学院大学学園百年史』）

- ⑯ 同年、東京鉱業株式会社社長として石川県倉谷鉱山の経営にあたる（前掲『近江鈴鹿の鉱山の歴史』）。
- ⑰ 明治 22(1889)年、齊藤精一、湯川宗、金子俊一、杉村次郎の四君は規定の金二十圓を納めて終身会員となれり（『日本鉱業会誌』5（53）1889(明治 22)年）。
- ⑱ 明治 26(1892)年、杉村次郎の経営によって流下する鉱毒で被害を受けた犀川沿岸の漁民が県に対して陳情（『金沢市史・現代篇下』（金沢市、1969 年））。
- ⑲ 明治 28(1895)年 6 月 1 日、44 歳で死去（前掲『工学院大学学園百年史』）。